

に現存することゝなるに至るやうに、一即十の關係は、一に有限なるもの見、十に無限なるものを見てゐるのである。さらにその他の如斯く
ておいて、一即一、一即一の關係に於いてこのやうな考察になつてゐるのである。しかしながら、このやうな相即相入の根柢をなす
のは、諸同時の同時といふことと時をえらばなければならない。

五、同時といふこと

十玄四象、十對の世界的體相の論議は、一に有限なるもの見、十に無限なるものを見てゐるのである。それは、各々の世界的體相の論議でなければならぬ。畢竟無碍といふことは、
その論議多量あり、しかしそのこと世界に於いては、同時といふことではない。一多相即として相即相入の根柢をなすのが、一多相即として世界を形成
するといふことと時をえらばなければならない。それは、同時の同時に於いてあるといふことである。今時と結合が同時であり、昔反と即入、差
別と相即、一と多といふやうな世界の體相が同時であるといふことが、現象の世界的體相の根柢をなしてゐるものであり、相即相入
一多相即の同時を根本原理としてゐるのでなければならぬ。華一門が総門といわれ、九門各々の根柢には同時といふこと
が合はれてゐることには、おぼろげに、さうでなければ、相即相入、一多相即の論理的可能性、さらにその具體性が失われるのである。「無
碍前後相即、別、異、一切、自在、遍滿、參、不、離、或、成、或、起、或、現、此、依、海、印、三、昧、寂、然、同、時、顯、現、成、果。」といふやうに、十玄、十對、同時、異、定、であること
の意味を持つことと、華一門の體相である意味があるものでなければならぬ。この意味で、それは同時存在を意味するのである。

しかしこのやうに基礎的を同時といふことは、それが自らが現在といふこととなければならぬ。畢竟無碍法界は、十玄の理を念入とい
つて現在として我々の世界を覆照するのである。一切諸法が、盡々無盡に即入して現在において同時に異定相即であることがその構造であ
る。時即相即無碍として結合即入することと、すなわち「無碍參而不離」といふことは、華々の障礙が絶対にして無礙の障礙であること同時
に、その障礙も無碍でなくてはならぬ。このやうな無礙の障礙及び離障が結合するといふことは、無礙の現在において同時にのみ可能で
ある。無碍法、異定と異定の意味をなければならぬ。すなわち華三門の諸法相即自在門に、「一切衆生皆悉、同時同時同時同時同時同
時同時同時同時、無碍同時。」とあるのは、まさにこのことを明かにすると同時に、次の問題を包含してゐるのである。

それらも同時といふことが、相即相入が同時であるといふことから、多を多とすることを念入しては考へられぬことである。
一多相即の同時といふことは、無碍法である。同時といふ限り、多が同時であるといふこととなければならぬ。しかし又それらの多
が、同時、一多相即の同時を意味しななければならない。すなわち同時にであることとを意味してゐるものでなければならぬ。すなわち同時
に同時であることは、それら、それら之同時とは一面に於いては多を多と、他面とのやうな多が一であること、及び一であることをそれら
の中に念入してゐる。同時が現在の一念に於いてある限り、現在の同時性が意味され、同時は一念の性格であり、又現在の性格でな
ければならぬといふことである。

現在の時と同時性という概念、空論の相即という概念を空間に關しての抽象的な規定を意味しているのではなく、縁起としての現在の同時性を意味している。これは縁起が、縁起とか或いは因縁とかいわれることの根本原理である。それゆえ、現実の世界が縁起的といわれる時、のみでこのように同時性をいふことが強へ意味を帯びているのである。

以上考察したように同時とは、現在における縁起の根本をなすと同時に、時間・空間の相即の根柢でもある。それゆえ次に時間構造における非連続の連続を、華嚴の論議において考察したい。

4. 十世隔法異成 (即ち非連続の連続について)

隔法とは、三世が互いに隔りをもって相違異成ということである。過去はその當時において、現在の一念としてあつたといへ、すでに現在において過去であつて、今はや現在の一念ではない。それはどこまでも皆現在であつて、現在の一念に過去として含まれたものに違ひない。未来も同様にして、未来現在ではない。過・現・未の三世は、一面絶對の隔法であるのである。隔法といふが、それは絶對の隔法でなければならぬのである。その間を結合する向きの介在を許さないのである。それゆえ前後際断されてあることであり、非連続なものなのである。三世は、現在の一念に撰在されているのである。三世が隔法でないならば、過・現・未の区別はなくなり、そこは一時もなくなる。それゆえに時が隔法であるということば、それ自身は矛盾でなければならぬ。三世が隔法でなければなくなり、しかも隔法とすればそこも時はなくなる。それゆえに、時は単なる隔法でなく、又異成である。時は、隔法である三世が同時に異成して現在の一念に結合するということにおいて存するといわなければならぬ。異成とは、異なりながら成ずることである。すなわち隔法の含む矛盾が、異空意味する。しかし矛盾を媒介として成立するところに、異成の意味がある。そこには際断と結合が同時に存するということ意味がなければならぬ。隔法異成は、かくて時の成立の構造を現わしている。無縁の隔法である三世が、同時に現在の一念において隔法であることにおいてかえつて結合する。そこに三世即一念として現在の成立があり、時の成立があるのである。隔法(すなわち非連続)が、異成(連続)ということば、このように矛盾である。このような矛盾において、かえつて現実の時が成立するのである。

5. 縁起

以上述べたところから結論付けられることは、相即相入の論理は、形式論理があくまで矛盾の排除をもつて本来性とするのに反して、矛盾の性格を媒介として捉え、それをかえつて同時同一の契機とするところに存するといえるであらう。しかもかかる矛盾を媒介として、現実の世界や時が隔法異成的に成立するのである。したがつて隔法異成の現在とは、それ自身有即無、無即有としての意味をもつものでなければならぬ。現在の一念は、実不可得であり、同時に我々は何時も現在においてあるのである。現在が単に有過ぎないものである。

らば、理論的である。親・宗がそこに結合されるゆえんはない。療法にして矛盾である三世が結合するには、その現在は無の媒介の意味を帯びたものである。故に、

しかるに、無が無に過ぎないものならば、三世の成立はない。そこには現在というものを容れなくなる。有無同一のところに、現在の即入性が存在するのである。すなわち療法異成がそこに存在する。「有無、無有無二故。是即相照。……有力無力。無力有力無二故。是即相照。」といわれ、それが「若不爾者終不成」といわれる。このような場合、無縁の空なる時、その用は無力であり、体有なる時その体は有力を意味する。それゆえに、用の有力無力を体の空有に就して論ずることができよう。しかるにこの場の空・無は、それ自身無即有の意味をもつものでなければならぬ。有も同様である。無即有・有即無といわれる無の側面に体と力用の空・無力が考えられ、有の側面に体と力用の有・有力が考えられる。そこに即入がある。このような有即無・無即有として、現在を療法異成的に成立せしめる。このような構造を又、「即同即異。即多即少。即有即無。即始即終。即見自見一切無盡法門。」と述べてあり、ここに療法異成の論理構造の基礎があり、更にそれが等々無礙縁起の成立を支えているといえるであろう。

更に療法異成が相即相入といわれるのについて、その一多の即入が同時であるということが根本的な規定となっている。療法異成は、時間的にも空間的にも同時である。無底の療法である三世が、現在において即入的に結合するということは、それが療法と異成がいつも同時であることを要求するのである。

ゆえにその構造は、絶対矛盾的自己同一的に等礙無礙の法界ということになり、その根柢に同時ということが、同時媒介的絶対媒介としてあり、更にその創造において時間・空間的に療法異成即ち非違統の連続により、現実の世界構造を明かにしているのである。

《註》使用テキストは大正新脩大藏經による。

(一九六〇・四)